

市長は、就任以来、市職員に対して「あいさつ」の大切さを何度も説いていますが、それはなぜでしょうか。また、市長が市民のみなさんと一緒に作っていききたいこれからの長久手市とは…。就任1年を経過した吉田市長に伺いました。

～今こそ、絆を取り戻すチャンスするとき～

先日、全国で介護を必要とする認知症の高齢者が300万人に達したことが報道されました。平成14年の推計より10年も早く300万人に達したことになり、国の認知症対策の大幅な強化が迫られているところです。

長久手においても約40年後には、人口の約3分の1の人が65歳以上の高齢者になります。それと同時に、一人暮らしの高齢者も、今では考えられないほど増えていくでしょう。そうなったとき、家族、医療関係者、介護の専門家だけでは支えきれない事態になっているはずです。そのときに必要なのが、近所、地域での支え合いです。近所、地域、そして市内の事業者で協力し合い、互いのことを知り、気遣い合い、行政や専門家と連携することで、孤独死や、知らぬ間に認知症が進んでしまったということが防げるのです。



日本は、過去50年間、経済成長を続ける中で、住民は行政に税金を払って、生活に関わることを委託してきました。そうすることで、生活は楽になり、便利になりましたが、地域のつながりは薄れ、隣人の顔や名前すら知らなくても暮らせるようになりました。

しかし、「いざっ!」というときに「それでは困る」ということを、3.11の大震災を目の当たりにして、私たちは気付いたのです。それに気付いた今こそ、「絆」を取り戻すチャンスなのです。

長久手には、定年を迎えて時間に余裕があり、元気な人、またビックリするような豊かな経験や知識をもった市民の方々がたくさん住んでみえます。ぜひ、その人たちに地域に出ていただきたい。そのための仕掛けづくりをしていきたいと思っています。

～あいさつこそ、「日本一の福祉のまち」への第一歩～

絆は目に見えるものではありません。まずは、長久手に暮らす人々が、日々、道路で会えば知らない人同士でもあいさつを交わし、顔見知りになることが、絆づくりの第一歩だと思います。

私が朝、職員に向かってあいさつを始めてから約4カ月が経ちました。毎朝、あいさつを交わすだけで、「最近、元気がないな」だとか、同僚と会話をしながら

ら歩いている姿、あいさつをする態度などで、何となく人となりまでもが分かるものです。元気がなさそうな職員がいれば、「仕事はどうだ」と声をかけるようにしています。



よく、「あいさつしたのに、無視されたら恥ずかしい」とか「知らない人にあいさつするのは不審に思われるからイヤだ」という意見も耳にしますが、あいさつは慣れだと思えます。難しいことなんてありません。お金もかかりません。だからこそ、職員には、まず誰とでもあいさつを交し、そこから顔見知りになり、市民の方々と会話ができるようになってほしいのです。

私は、役所内だけでなく、市内を歩いているとき、すれ違う人にあいさつをしています。先日、毎日すれ違うおじさんに「あなたは私のことを知っていて、あいさつをしているのですか？」と尋ねられました。「いや、知らない。ただ、私はみんなにあいさつしているんだ」と答えたら、それまでは怪訝そうにしていたそのおじさんとも、次の日から実に爽やかにあいさつを交わせるようになりました。そうしたことが、市内全域で、全市民で行われるようになれば、素晴らしいことで、それが、「日本一の福祉のまち」への第一歩だと思っています。

～ワイワイガヤガヤの議論を～

行政経験、議員経験の全くない、言ってみれば普通の市民が、市長になりました。「行政の当たり前」に私も戸惑い、私のやり方に職員も戸惑ってきた1年だったと思います。

これまでは、行政がなんでもかんでも、やってきました。市民からすれば、「税金を払っているんだから、やってもらおう、こうして欲しい」と思った場合、なかなかその要望が進まないと腹が立ちます。そして「どうなっているの？」とまた、要望する。しかし、これでは何も生まれません。それを市民が中心になって、みんなで知恵を出し合って取り組めば、例えその課題への解決が進まなくても、何かが生まれるのです。

これまでは、結果ばかりが求められてきましたが、これからの時代は、プロセスが重要です。行政情報を住民と共有し、ワイワイガヤガヤと議論する場を持ち、市民が主導で行うことに対して失敗を許す土壌を作ることが求められていると思います。その第一歩が、地域共生ステーションであり、市民まつりなのです。

住民のみなさんには、ぜひ行政に関心を持っていただき、その議論に参加し、一緒に行動することを求めています。